

木村智哉君からのメール (2)

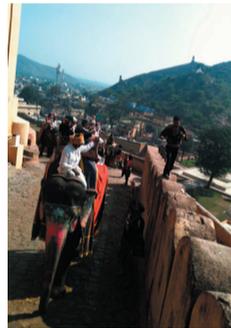
そんな独特な雰囲気も素敵なバナラシですが、なによりこの街が最高だった理由が人の温かさでした。デリーの冷たい人々に心が折れていた僕でしたが、バナラシの人々は誰しもが親切で優しく、初対面なのにずっと前からの友達のようなフランクさをもって接してくれました。それが本当に嬉しかったです。バナラシの人は親日家が多く、僕が日本から来たことと知ると話題は日本の女性や映画や街並みや出稼ぎの相談などに飛躍し気がいたら二時間くらい立って雑談しているなんてことも何度かありました。



朝日を眺めて、屋台で飯を食べ、あてもなくバナラシの街を歩きまわり、疲れたら一杯10円のチャイを飲んで休憩しました。途中何人もの人と話しいつものまにか夜になっているなんてことを毎日繰り返しました。そのうち友達もたくさんできて一人の寂しさなど一切感じませんでした。しかし、ヒンドゥー語はもちろん英語ですら満足に喋れない僕が、どうやって彼らと何時間もコミュニケーションをとっていたのかおぼえていないんです。でもくだらない下ネタなどを言い合い笑っていました。そのくらい確実に意思の疎通はとれていたから不思議です。英語やヒンドゥー語を上手に使えることに越したことはありませんが、言葉の壁なんてものは案外それほど深刻な問題じゃないのかも思ったりもしました。

もちろん、友達になったのはインド人だけじゃなく、欧米の人や韓国の人だったり、他のアジアの国の人たちや当然日本人の人とも何人も友達になりました。タージマハルで顔見知りになっていた同じような年で一人旅をしている日本人大学生とバナラシで偶然再会して、他にも知り合った一人旅をしている日本人大学生五人くらいでご飯を食べたりもしました。

バナラシに住民票を移したくなるほど、居心地が良い土地でしたが、二週間と限られた時間の中で、せっかくインドに来たのだから象に乗るべきだと思いバナラシを出ることにしました。世話になった人たちに挨拶をしてジャイプールという街に向かいました。ジャイプールは拠点を一泊200円のドミトリ(大部屋)にして、象に乗って世界遺産の城を一日中ほつつき歩いたりして数日間すごしました。この街もバナラシほどではないですが、人が柔和で食べ物は美味しく景色もきれいで素敵な街でした。象には世界遺産にもなっている城に行くために乗ることが出来るのですが、ゆったりと象の背に乗り世界遺産の城に登るのは王様になったようでとても良い気分でした。それから帰国すべくデリーに戻りました。デリー門などの観光地に足を運ぶもガンジス河の朝日やタージマハルや象に乗るなどの感動には程遠く帰国までの2日ほどはメインバザールで赤川次郎や角田光代の古本を買い込みセントラルパークで日向ぼっこをしながら合計で10冊ほど読んで過ごしました。赤川次郎の本が異常に読みやすかったというのがありますが、短期間でこんなに大量の本を読んだのは初めてです。メインバザールにある日本の古本はどういうわけか赤川次郎と西村京太郎の本が多かったです。ちなみに僕がインドで読んだなかでは角田光代さんの「対岸の彼女」が一番面白かったです。こんな感じで、インド最後の数日間は読書して過ごすという贅沢なようなもったいないような過ごし方でした。



こうして僕のインド旅行は幕を閉じました。というわけで、簡潔にインド旅行をまとめようと思って書きはじめたのですが、なんだかドラドラ長いだけでとても人様に見せるようなものではなくてしまい申し訳ないです。

自分探しの旅なんてというのが昔流行りましたが、たった二週間で自分を探してできるなんて不可能で、ましてや新しい自分を見つける余裕なんてありません。でも、1人で知らない土地を旅行するという事は、そこで見たり触れたりして感じたものを誰とも共有できない寂しさのかわりに、その感じたものに1人で向き合い消化する度に、少し自分の世界がひろがったような気がしました。そんな気がただけかも知れないけど、この気のせいは自分にとってとても大きな収穫だと思います。時間とお金があればまたどこか、海外でも日本でも、色々旅してみたいと思っています。

3日前(2月27日)突然、卒業生の松田野々花さん(釧路公立大2年生)がお母さんと一緒に来ました。どうしたのか聞くと、明後日(29日)に1年間の留学のため韓国へ行くということでした。お母さんの話では、彼女は幼稚園から大学までずっと家の近所でお母さんのそばから離れたことがなく、今回思い切って決断したそうです。

こつこつ型で、どちらかと言うとマイナス思考の彼女が、高校は3年間無遅刻、無欠席で、大学での成績もかなりいいということでした。

いまの自分があるのは、「中1からステップゼミナールで勉強することで基盤をつくれ

たことです。」とお母さんが言っていました。

始めのころは分からないところを簡単に教えてもらえないことに戸惑ったのですが、自分の力でやってみることに努力することが出来るようになり、それで今の自分があると。

そんな彼女が1年間外国で一人で暮らす事で、今までに自分になかったものを見つけ、客観的に日本という国や社会、そして家族、人を見る事で大きく成長して帰って来ると思います。皆さんも木村君や松田さんのようにどんどん外へ出て自分の可能性に挑戦してみるといいと思います。

若者に増える現代風うつ病-仕事に熱意なく規律苦手

真面目で几帳面、仕事熱心で責任感が強い人がかかりやすいとされてきたうつ病。このところ20~30代の若い年齢層で、従来のうつ病とは異なる「現代風」のうつ病が増加しているという。メディカルケア虎ノ門(東京都)の五十嵐良雄院長(精神科)は「これまでのうつ病のイメージに当てはまらないため、仮病などと勘違いされやすい。まず、病気を正しく理解することが大切です」と呼び掛ける。

▽社会的背景が原因か

従来のうつ病との一番の違いは、患者の基本的な考え方ややり方が現代的なことだという。五土風院長は「現代風のうつ病の患者は、もともと仕事熱心なタイプではなく規律を守ることが苦手、自己中心的でコミュニケーション能力に乏しい傾向があります。そのため自分を過大評価し、病気の原因を他人のせいにするのも大きな特徴です。」と話す。

このうつ病が増加している背景について、「社会的要因も大きいのでは」と五十嵐院長。現在の若い世代は、少子化で過保護に育てられ、ストレスに弱い傾向がある上、不景気に加えて実力主義が導入され、会社内でのストレスが昔より多くなっていることも、病気を引き起こす一つの理由で題ないかというのだ。

▽集団療法が効果

現代風のうつ病は、薬が効きにくいことが多い。しかし、職場復帰を目的とした「リワーク・プログラム」という療法が開発され、大きな効果が見られている。この療法は、「オフィスワーク」や「卓球」「頭と体のストレッチ」などを集団で行うもので、同クリニックでも取り入れている。対人関係が苦手な患者たちも互いに共同で一つの作業を行うことで、職場で必要な協調性を身に付けることができる。さらに、同じ病気を抱える者同士で交流し、自分の考え方の偏りなどの問題点に気付くという効果も期待されている。

五土風院長は「現代風のうつ病は、周囲が『怠けている』とか『仮病』と決め付けると、治療が遅れることもよくあります。他の病気と同じで、早期に治療を受けることが重要」と強調する。本人だけでなく、周囲も「おかしいな」と思ったら、早めに専門医に相談するよう勧めてほしい。

~釧路新聞から~

英語「役に立つ」7割!

文部科学省・国立教育政策研究所が全国の中学3年生に実施したアンケート調査で、7割の生徒が「英語は将来の就職に役立つ」と答える一方、将来、英語を使う仕事に就きたいと強く希望する生徒は1割にとどまることが分かった。

調査は昨年11月、中学3年生3225人を対象に実施。「英語の学習が大切」と考えた生徒は「どちらかといえば」を含め85%にのぼった。「英語を学習すれば、好きな仕事につくことに役立つと思うか」との問いには、36%が「そう思う」、34%が「どちらかといえばそう思う」と回答。肯定的な意見は計70%と、2003年の前回調査より、23ポイントも増えた。

しかし、「英語は好き」は22%、「どちらかといえば好き」は30%どまり。「将来、英語の勉強を生かした仕事をしたい」と強く願う生徒はわずか11%で、前回より6ポイントも減った。逆に「生かした仕事をしたくない」が43%で、前回(36%)から増えた。(1月29日 読売新聞)

日本人学生の海外への留学数が、どんどん減っていると言う。国連の職員にも日本人の応募は減る一方。「将来、英語の勉強を生かした仕事をしたい」と願う生徒が減っていることと関係するはずだ。

留学生の減少は、日本の学生が内向きになったからだと言われているが、熱意がなかったり、英語力に自身が無いからだろう。同時に、英語なんか出来なくてもいけば何とかなる、と言う若武者もいなくなっていることは事実です。まずは、英語の勉強、がんばろう。そして、何でも見てやろうと思うことです!!